

機関番号：72810

研究種目：基盤研究(B)(海外学術調査)

研究期間：2008～2010

課題番号：20401039

研究課題名(和文)

中央アナトリアにおけるハジトゥール・ホユック遺跡の考古学的予備調査

研究課題名(英文)

Archaeological Surveys at Hacituğrul Höyük in Central Anatolia

研究代表者

山下 守 (Yamashita Mamoru)

中近東文化センター附属アナトリア考古学研究所・研究員

研究者番号：70370195

研究成果の概要(和文)：ハジトゥール・ホユックは、アンカラの南西約60kmに位置する、直径650m、高さ26mの大規模な遺丘である。同遺跡の組織的発掘調査に備えて、2008年から2010年まで考古学的予備調査を行った。その結果、この遺跡がフリュギア時代(前9世紀-前4世紀)を通して居住され、特に、後期フリュギア時代(前6世紀-前4世紀)には複雑なプランの大建築コンプレックスを持つ城塞都市が発展したことが確認された。

研究成果の概要(英文)：Hacituğrul Höyük, a large archaeological site (650 meters in diameter and 26 meters in height), is situated about 60 kilometers southwest of Ankara. In preparation for systematic excavations, in 2008–2010 we carried out archaeological surveys at this site. These surveys revealed that Hacituğrul Höyük was settled through all the phrygian periods (from the 9th to 4th century B.C.) and especially in the late phrygian period (from the 6th to 4th century B.C.) developed here a huge fortified city, provided with large architectural complex with complicated plans.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	2,800,000	840,000	3,640,000
2009年度	4,700,000	1,410,000	6,110,000
2010年度	4,600,000	1,380,000	5,980,000
年度			
年度			
総計	12,100,000	3,630,000	15,730,000

研究分野：人文学B

科研費の分科・細目：史学・考古学(3105)

キーワード：考古学、アナトリア、鉄器時代、フリュギア、都市遺跡

## 1. 研究開始当初の背景

ハジトゥール・ホユックは、トルコ共和国の首都アンカラの南西約60kmに位置する中央アナトリアでは最大級規模(直径約650m、高さ約30m)の遺丘である。同遺跡では、1970年代のトルコ調査隊による試掘調査で、鉄器時代に中央アナトリアに栄えたフリュギア王国の巨大な城塞都市の遺構が眠っていることが明らかにされた。実際このハジトゥール・ホユックは、フリュギア王国の首都ゴルディオンと共にフリュギア中

心地域(中央アナトリア西部)に存在し、なおかつゴルディオンより遥かに大きな規模を有する。それ故、この遺跡が首都ゴルディオンに勝るとも劣らないフリュギアの最重要都市の一つであった可能性が極めて高く、フリュギア研究の新たな展開の鍵を握る遺跡として、その本格的発掘調査の実現がこれまで強く希求されて来た。

中央アナトリアの鉄器時代フリュギア研究では、1950年以來アメリカのペンシルベニア大学によって組織的発掘調査が行われ

ているフリュギアの首都址ゴルディオオンが常に主導的な役割を果たして来た。そのためにフリュギア文化に関する問題は、これまですべてゴルディオオンを基準にして論じられる傾向が強い。特に、フリュギア文化の変遷過程、編年に関しては、専らゴルディオオンの調査結果に基づいて組み立てられた枠組みが、唯一の基準として、長く一般に受け入れられて来た。

1990年代以降中央アナトリア東部にある遺跡の発掘調査（特に、中近東文化センター附属アナトリア考古学研究所によるカマン・カレホックの発掘とドイツ考古学研究所によるボアズキョイの発掘）が進展し、フリュギア東部に当たる地域における鉄器時代文化の様相が解明されることとなった。その結果、この地域のフリュギア東部文化には、ゴルディオオンを基準にして構成されたフリュギア文化の発展の一般図式には当てはまらない発展過程が確認されたほか、ゴルディオオンとカマン・カレホックのフリュギア文化の編年の間にも大きな矛盾が存在することが明らかになって来た。

この様にカマン・カレホックを中心とするフリュギア東部地域の遺跡の調査研究を通して、ゴルディオオンの調査結果のみに基づくこれまでのフリュギア文化の発展過程と編年の枠組みに疑問が生じて来た結果、最近のフリュギア研究では、こうした事態に対応する新しい動向が生まれて来ている。それは、従来のゴルディオオンを偏重した安易なフリュギア研究の反省の上に立ち、異なる地域における多数のフリュギア遺跡の調査研究を基礎にしてフリュギア文化を多元的に正しく捉え直そうと言う動きである。そこでは第一に中央アナトリア西部のフリュギア中心文化を、ゴルディオオンを相対化させる形で把握し直すことが必要不可欠であると考えられ、ゴルディオオンに匹敵し、フリュギア中心文化の体系的理解を可能にする重要遺跡の発掘調査が最優先課題と見なされている。

中近東文化センター附属アナトリア考古学研究所は、これまでカマン・カレホックの発掘を通じて中央アナトリア東部のフリュギア東部文化の解明に大きく貢献して来たが、上述した様な最近のフリュギア研究における研究動向を踏まえ、今後はカマン・カレホックでの研究成果を基盤にして、中央アナトリア西部のフリュギア中心文化の調査研究に取り組む方針を決定した。そして調査研究の対象としてはフリュギア中心地域の最重要遺跡の一つでありながら、試掘調査以後長らく放置されて来たハジュトゥール・ホユックを選び、この遺跡における鉄器時代フリュギアの大城塞都市遺構とそれに付随する遺跡周辺のトゥムルス(墳墓)群の新たな組織的発掘調査を実施することを計画

した。

## 2. 研究の目的

ハジュトゥール・ホユックの様な巨大な遺跡において発掘調査を開始するためには、準備作業として、綿密な予備調査を行い、周到な発掘計画を立てることがぜひとも必要である。そこで(財)中近東文化センター附属アナトリア考古学研究所では、同遺跡の新たな組織的発掘調査に備えて、遺跡の性格、年代を予め把握するために、2007年より考古学的予備調査を開始した。そして同年に同志社大学情報文化学部の協力の下に遺跡の試験的な地形測量を行った。

本調査研究は、この2007年度のハジュトゥール・ホユック考古学的予備調査を継続する形で、2008年から2010年まで以下の点を具体的な目的として実施された。

(1) 2007年度の地形測量を継続し、遺跡と周辺地域全体の精密な地形図を完成させる。

(2) 遺跡の空撮を行い、地表面に現れている遺跡内の建築遺構と周辺地域の関連遺構を確認する。

(3) 遺跡全体の地中磁気探査を実施し、地表下にある都市建築遺構を確認し、そのプランを解明する。さらに遺跡周辺地域の一部でも地中磁気探査を行い、遺跡の城塞都市に関連すると考えられる城外施設(墓地、道路等)の位置、プランを解明する。

(4) 遺跡表面に散布する遺物を採集し、遺物の比較研究から遺跡にある遺構の存続年代を推定する。

## 3. 研究の方法

ハジュトゥール・ホユックにおける将来の発掘調査のために遺跡とそこに残された遺構に関する出来るだけ多くの情報を獲得するという目的を持つ本考古学的予備調査では、考古学的な調査(表面採集調査等)と地理/地理情報学的な調査(地形測量、地中探査等)を組織的に組み合わせた調査を行うことが、最大の成果を得るための最良の方法と考えられた。そこでハジュトゥール・ホユックにおける本予備調査は、中近東文化センター附属アナトリア考古学研究所と、地理/地理情報学的な調査において大きな成果を収めている同志社大学文化情報学部文化情報学科時空間情報科学教室との共同調査として行なわれることになった。

本予備調査が目的とするところの、

(1) 遺跡及び遺跡周辺地域の地形図の作成については、研究分担者津村宏臣(同志社大学文化情報学部講師)が、GPSとレーザー測距儀を用いて遺跡とその周辺地域の約2万地点に及ぶ地形測量を行い、その測量結果のCG解析を通して2D化、3D化することによって完了した。

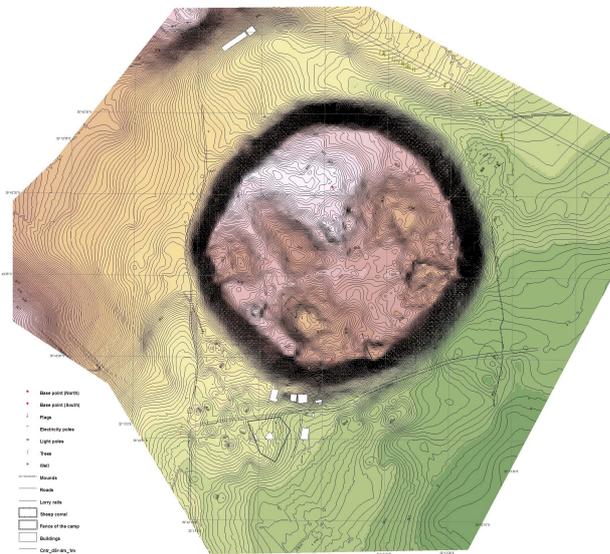
(2) 遺跡全体の空撮については、研究代表者山下守が気球を利用して、高度 300m と 500m の上空から実施した。

(3) 遺跡及び遺跡周辺地域の地表下にある建築遺構の確認とそのプランの解明については、当初、研究分担者津村が、当該地域に設定されたグリッドにおいて地中磁気探査、レーダー探査を実施し、その探査結果を CG 解析することによって行う計画であった。しかし、トルコ文化観光省考古局の調査許可の関係から計画した地域全体で地中探査を実施することが困難となり、実際には遺跡頂上平坦部の南側地区のみを地中磁気探査出来たに留まった。こうした事情により、地中探査に代わって、GPS とレーザー測距儀を用いて遺跡頂上東側地域の地表に部分的に露出した石壁群の測量調査を代替え調査として行い、同地域に残存する建築遺構のプランの解明に努めた。

(4) 遺跡にある都市遺構の存続年代の推定については、研究代表者山下が、① 遺跡頂上平坦部に散布する遺物を設定されたグリッド毎に採集し、② 採集遺物を、形式分類と他遺跡出土遺物との比較研究を通じて年代決定することによって行った。

#### 4. 研究成果

(1) GPS とレーザー測距儀を用いて遺跡とその周辺地域の地形測量を行い、得られた測量結果を CG 解析することによって、20cm 及び 50cm コンターの地形図、エレヴェーション入り 20cm コンター地形図、ヒルシェイド地形図などが作成された。



(図1) ハジトゥール・ホックとその周辺地域のエレヴェーション入り 20cm コンター地形図

遺跡の地形図からは、(1) 遺跡は上から見た形態が完全な円形ではなく、東部でかなり角張った形をしていることが明確となった。

また(2) 遺跡頂上部は平坦ではなく、高まりや窪みでかなり複雑な地形を呈していることも確認された。さらに、(3) 遺跡頂上部の東側隅にある窪みが遺跡の東部の角張りに向かって急激に落ち込んでいることから、この遺跡東部の角張り部分に大規模な城門が存在する可能性のあることが分かった。

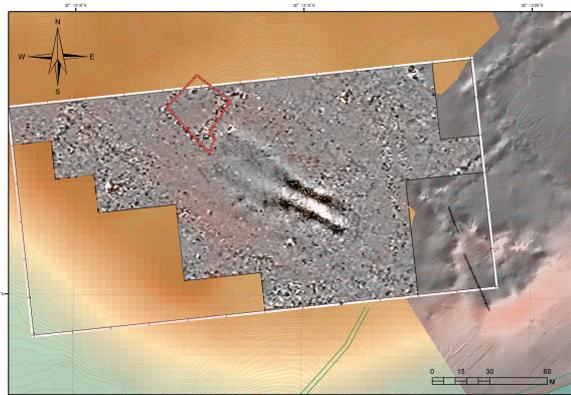
(2) 気球を利用して、高度 300m と 500m の上空から遺跡全体の空中写真が撮影された。



(図2) 高度 500m 上空からのハジトゥール・ホックの空中写真

空中写真からは、(1) 遺跡の北東から南東にかけての縁部には城壁及びそれに関連する遺構の存在を示す跡を、また、(2) 遺跡頂上の北東部にある窪みの周辺には矩形を呈する大規模な建築遺構のものと考えられる跡を確認することが出来た。

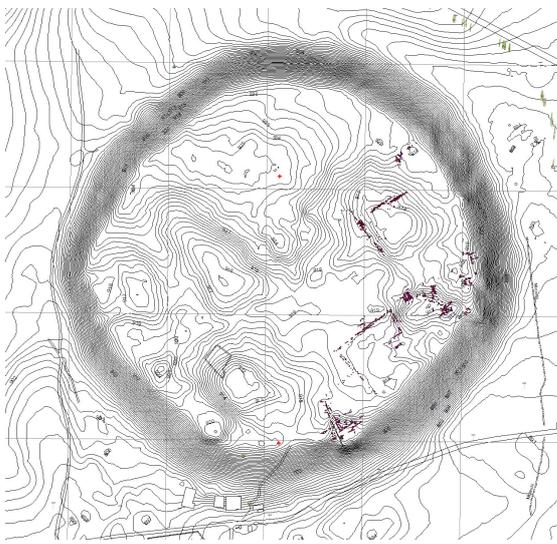
(3) ① トルコ文化観光省考古局の調査許可の関係から、本考古学的予備調査では遺跡頂上部の南側地域に限って地中磁気探査が行われた。



(図3) ハジトゥール・ホックの頂上部南側地域における地中磁気探査

この地中磁気探査の結果、遺跡南側の縁に沿って一連の矩形の遺構が並んでいることが確認された。これらは遺跡の周囲を廻る大規模な城壁に関連する建築物と考えられることから、この遺跡には複雑な城壁システムが存在したことが明確となった。また、遺跡頂上部南側にある深い窪みのあるところでは、プランは不明ではあるが、一つの公共建造物と考えられる大規模な建築遺構の一部が確認されている。

② 遺跡の限定された地域でしか実施出来なかった地中磁気探査の代替調査として、遺跡頂上部の東側地域においてGPSとレーザー測距儀を用いた地表に露出した石壁群の測量調査が行われた。



(図4) ハジュトウール・ホユック東側地域において確認された地表に露出した石壁群

この測量調査の結果、遺跡頂上部の東側縁で部分的に見られる巨大な城壁の構造が明らかにされた。このハジュトウール・ホユックの城壁は、切り石を積み上げた両サイドの石列の間の空間に大小の礫を詰めて構築されており、ゴルディオンの城壁と同じく、フリュギアに典型的な石壁構造を有する。

また頂上平坦部の東側地域には、北西-南東方向に軸を持ち、長さが100mを超す大規模な矩形の建築遺構が、幾つも連なる様に存在していることも確認された。これらの一部が地表に露出した地表直下の遺構群は、同一方向に方位を有し、同一の石壁構造を示すので、すべて同時期のものと考えられる。これらのことから、この都市遺跡の公共的な大規模建築コンプレックスが遺跡東側のこの地区にも存在していた可能性の高いことが明らかになった。

以上の地中探査、測量調査の結果をまとめると、ハジュトウール・ホユックは、周囲にフリュギアに特徴的な建築構造の巨大な城

壁を備え、少なくとも遺跡頂上部の南側及び東側地域には多数の矩形の部屋で構成された複雑なプランの大公共建築コンプレックス群がある大都市の遺跡であることが明確になった。

(4) ハジュトウール・ホユック遺跡に残存する都市遺構の存続年代を推定するために、地表で組織的に採集された土器片を形式分類し、他遺跡からの出土資料と比較して年代決定する研究が行なわれた。

この研究の結果、以下の様なことが判明するところとなった。

① 遺跡頂上部において採集された土器片のほとんどは、鉄器時代のフリュギアに特徴的な黒色磨研土器、灰色土器、彩文土器に同定されるものであった。

これらのハジュトウール・ホユックのフリュギア土器の中で最も大きな割合を占めるのは、ゴルディオンのYHSS 4層やカマン・カレホユックIIa5-3層から出土した土器に形式的に近似し、後期フリュギア時代(前6世紀-前4世紀)に年代付けられる土器であった。

こうした後期フリュギア時代の土器と比較すると量的には少ないものの、ゴルディオンのYHSS 5層、カマン・カレホユックIIb/IIa7-6層から出土した土器に類似する、中期フリュギア時代(前8世紀-前7世紀)に属する土器もかなり多く確認された。



(図5) ハジュトウール・ホユックの中/後期フリュギア時代の灰色、黒色磨研、彩文及び赤色土器

遺跡で表採されたフリュギア土器の中には、ゴルディオンのYHSS 6層出土のものに比較し得る、前期フリュギア時代(前9世紀)に属すると考えられる灰色土器、彩文土器が少量ながらも認められた。

こうした事実からは、ハジュトウール・ホユックはフリュギアの全時代を通して居住されたことが確認されると共に、時代を追ってその都市の規模が拡大した可能性も指摘出来る。



(図6) ハジウトゥール・ホユックの前期フリュギア時代の彩文及び灰色土器片

② ハジウトゥール・ホユックで表採された土器片の中からハンドメイドの黒色磨研土器片が数点ながら確認された。これらの土器片とゴルディオンの YHSS 7B 層で発見された、前期鉄器時代(前 11 世紀-前 10 世紀)に年代付けられるハンドメイド黒色磨研土器との関連性を認めるならば、ハジウトゥール・ホユックがフリュギア時代以前の前期鉄器時代から既に居住されていたと言える。



(図7) ハジウトゥール・ホユックの前期鉄器時代のハンドメイド黒色磨研土器

③ 遺跡で表採された土器の中で鉄器時代以降の時代に属すると考えられるものとしては、ゴルディオンの YHSS 3B 層やカマン・カレホユック IIa1-2 層で出土する前期ヘレニズム土器に比定される赤色系土器が僅かに確認されたに過ぎない。このことから、ハジウトゥール・ホユックは、ヘレニズム時代初頭以後はもはや居住されなかったということが明確となった。

以上の表採土器の年代研究の結果をまとめると、鉄器時代のハジウトゥール・ホユックは、おそらく前期鉄器時代(前 11 世紀-前 10 世紀)に居住が始まり、前期フリュギア時代(前 9 世紀)、中期フリュギア時代(前 8 世紀-前 7 世紀)、後期フリュギア時代(前 6 世紀-前 4 世紀)を通して継続して居住がなされたこと、またその間に都市規模がかなり拡大したことが明らかになった。さらに、後期フリュギア時代に続くヘレニズム時代初頭以降は、ハジウトゥール・ホユックは居住され

ずに放置されたことも確認された。

	カマン・カレホユック	ゴルディオンの YHSS	ハジウトゥール・ホユック	(時代区分)	
1200 B.C.					1200 B.C.
1100 B.C.		YHSS 7B		前期鉄器時代	1100 B.C.
1000 B.C.		YHSS 7A			1000 B.C.
900 B.C.	IIc3-1	YHSS 6B			900 B.C.
800 B.C.	IIc3-2	YHSS 6A			800 B.C.
700 B.C.	IIc1	磨研層			700 B.C.
600 B.C.	IIb / IIa7(+)	YHSS 5		中期フリュギア時代	600 B.C.
500 B.C.	IIa6				500 B.C.
400 B.C.	IIa5-3	YHSS 4		後期フリュギア時代	400 B.C.
300 B.C.		YHSS 3B			300 B.C.
200 B.C.	IIa2-1	YHSS 3A			200 B.C.
100 B.C.				前期 ヘレニズム時代 後期	100 B.C.

(図8) ハジウトゥール・ホユックにおける都市遺構の推定存続年代

以上の様に、ハジウトゥール・ホユックにおける本考古学的予備調査によって、同遺跡がフリュギアの首都ゴルディオンの匹敵する、あるいはそれ以上の重要性を有するフリュギア都市であった可能性が改めて浮き彫りにされるところとなった。首都ゴルディオンの隣接した場所に存在したこのフリュギアの大都市は、その近接性故に、ゴルディオンのような政治的中心地ではなく、それとは異なる機能を有する(例えば宗教都市の様な)都市であったであろうことが推定される。それ故、同遺跡の新たな組織的発掘調査からは、ゴルディオンでは見ることの出来ないフリュギア文化の新しい側面が解明され、フリュギア文化の多面的な理解への道が開かれる可能性が一際高いと言える。さらにこの遺跡の調査研究によってもたらされるフリュギアの歴史、社会、文化全般に関する新しい知識は、ゴルディオンの調査結果のみによって形作られて来たこれまでのフリュギア像を大幅に修正し、フリュギア研究全体の発展、刷新に大きく貢献することも間違いのないと思われる。

5. 主な発表論文等  
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計2件)

- ① 山下 守、「2008-2010年度ハジュトゥール・ホユック考古学的予備調査」、2010年度トルコ調査報告会、2011年3月26日、中近東文化センター
- ② 山下 守、「ハジュトゥール・ホユックにおける考古学的予備調査」、第19回トルコ調査研究会、2009年3月29日、中近東文化センター

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況(計0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

山下 守 (YAMASHITA MAMORU)  
中近東文化センター・アナトリア考古学研究所・研究員  
研究者番号：70370195

### (2) 研究分担者

津村 宏臣 (TSUMURA HIROOMI)  
同志社大学・文化情報学部・講師  
研究者番号：40376934

(3) 連携研究者 ( )

研究者番号：